子供の友としての動物

ひさ子

子供は、生物をも無生物をも自然物をも人工物をも、自分の友といたします。已に何物をも友といたします以上、大人は、子供が、いかに良き友と良く交はりつゝあるか、其友をどんなに取扱つて居るかなどいふ事柄に對して、常に注意を拂はなければなりませぬ。

動物は子供の親しい友の一つでございます。今日は之に付て少し考へて見たいと存じます。

兎々何を見てはねる十五夜御月樣見てはねるといふ童謡がございますが、或時私が多勢の子供と一緒に之を謡つて遊んで居りますと、子供等は之を動物を代へて盛に歌ひ出しました。曰く犬や〳〵馬や〳〵、牛、猫、鼠、豚、蝶、烏、鳶、雀、蟻など、殆ど口をついてそれからそれへと出て參りまして大層喜んで居りました。又或時一兒の「アタシノウチノ小サナ犬はネ、アタシが驅け出すとツイテ來ますよ」からはじまつて、皆々われも〳〵と語りはじめました。曰く「ウチノ泰チャンが何時でも猫にビスケットをヤルモノデスカラ其猫はネ泰チャンニバツカリクツヽイテアルキマス」「オトナリの犬はネオアヅケッテ言ふと食べナイデ待ッて居ッてヨシッて言ふと食べマス」「イツカネ烏がオサカナノ頭を持て天へ飛ンデ行キマシタ」「ウチノ猫ハネ梯子段ヲシューッテ上リマス」「モーセンニネアタシノウチノ前に小サナ犬の子が一疋捨てゝアッテキュー〳〵言てタノデスヨ、ソシタラバ荷車のオヂサンが來て蹴飛バスノデスヨ、二番目に來た人は良い人で危イッテヨケ

ナガラ行きました、ソースルトヨンの子が、アタシ貰てイクツア持て行きました」など丶實にはてしもなく語るのでございます。

右はホンの一例でございますが、子供が如何に動物に對して興味を有て居るか、如何に常に動物を觀察して居るか、如何なる動物が特に子供に親しいか、動物に付て歌い、語り、きかせらる丶事を如何に彼等は喜び樂むかといふ樣な事は、何時も子供を御扱ひになる方々の御覽になる處でございませう。

子供が動物に付て語る事柄などに付て考へて見ますと、まづ彼等は常に動物の性質習慣する事爲す事を面白がつて或は珍らしがつて見て居るといふ事は確かでございます。又動物の內の或物は愛すればよく懷きて敢へて人に危害を加ふるものではない、人の親切は動物も之に感ずるものである事も知らず〳〵觀察されて居ります。又子供は如何に動物を愛撫する性を有て居るか、如何に其安否起居動作に注意して居るかといふやうな事も屢ります、動物虐待とまでは行かずとも少なくとも動物に對して同情なき取扱をして居る大人がいかに世の中に多くあるか、之を見聞く子供はとりも直さず惡い手本を示されて居る事になるといふやうな事も考へられます。

一体子供は自分自身已に活動が盛んで其身体は絕えず動いて居りますが、又外物も動いて居る方を歡迎いたします。ジッとして居る草木よりは風に動かされて葉のそよいで居る方が面白かつたり、サラ〳〵と流れる小川が嬉しかつたりいたします。まして心といふものを持つて居つて自分で動

く動物は非常に其好み愛し喜ぶ所となつて、從て動物の畫、話、歌などいづれも子供に喜ばれます。誠に動物を親愛する心情は子供の本能として有つて居る樣に思はれます。動物は人間よりも下等であるなどいふ六かしい事はあまり解りもせず考へもせず、丁度我友であるかの樣に考へたり扱つたりして好愛するのは子供の自然かの樣に考へられます。

動物に對する此子供の好愛の情こそ誠に喜はしい尊いもので、之を長ぜしめ之を移して以て人に對する道を盡させるべきで、子供が子供相應の人道實踐の初歩として、まづ動物を親切に取扱ふといふ良い精神習慣を養はなければなりませぬ。それには、動物には生命があるといふ事、心といふものを有て居る事、喜怒哀樂の情あり知覺感覺ある事、人間の樣な詞で其苦痛や喜びを言ひ現はす發表するといふ力はないが嬉しい事は動物でも嬉しいし、打たれゝばやはり苦しくもあり痛くもあるといふ樣な事、此無告の動物をいたはるのは人類の道であるといふ事などは、是非知らしめ感せしめて、どうか動物に對する温かな同情を益々發達助長させたいものでございます。自然より子供に與へられたる一個の友として之に親切を盡す樣にさせたいものでございます。

家に家畜又は其他の動物を飼養して、子供が其爲にいろ〳〵の事をしてやるといふ風になつて居りましたならば、之に由て積極的に動物に對する道德を敎へる事ができますが、わざ〳〵飼養した物でございません場合にても、犬、猫、雀、烏、蟻、蚯蚓、何でも手近な物に由て之に對する愛護の情

を養ふ事ができると思ひます。大人がまづ動物愛憐の温情を有つて居つて其つもりで子供を導ささへすれば、隨分其方面を養ふ事ができるでございませう。

一昨年の事でございました。私が毎日多勢の子供を遊ばせます庭園の一部の地面に蟻がいくつも〳〵住處を作り穴をあけました。之を發見した子は、「ヤー蟻ノオウチ」と言ふのでふれまはる、衆兒が集まる、折よく蟻が出たり入つたりする、遠方から何かを引張つて來る、砂糖をやると眞黑に集まつて來る、などからはじまつて、此いくつかの穴と之に住む蟻とは、子供に深き興味を與へまして、毎日々々衆兒が必ず此處を見まふといふ事になりました。そうして見て居りますを「モシタレカヽ知ラズニ踏ムト穴がツブレテ蟻ガカワイソー」といふ事で、二三兒の發起で棒切をさがして此處に繩張をいたしました。そうして相變らず毎日此繩張のまはりにしやがんでは「蟻ハフタリデ逢フト話ヲシテマス」とか「ソラ出テ來マシタ」とか「ハイリマシタ」とか觀察して居ります。そうこうするうち段々夏になり其繩張内はたれも踏まぬ爲に小さな草が澤山生えて參りました。すると多くの兒が申しますには「此草ハトラズニオイトキマショー、暑クナルト蟻ガミンナデ此草ノ蔭デ涼ミマス子」と、又時々小さな旗を豆細工などでこしらへまして、「今日ハ蟻ノオウチノオマツリ」などと言ひながら其繩張のまわりに立てたりなどいたします其樣子恰も蟻を我友であるかの如く感じて居る樣でございまして誠に良い事であると益々其方に導いた事でございます。

動物を親切に取扱ふといふ事が人の道であり子供の道である以上、之に不親切をせぬは元より、假にも動物を虐待するなどは少しもさせてならぬといふ事は分り切つた話でございますが、實際世の中には之をする大人や子供が隨分多くございます。瘠せこけた馬に身に餘る重荷を載せて炎天を引張り廻し、歩みがのろいといふので情容赦もなくひつぱたく大人もあれば、蜻蛉の足を拔いたり、蚯蚓を幾切にも切つたりするいたづらつ子もございます。動物を好愛するのは子供の本能と認めらるゝのにも拘はらず、右の樣な子供があつたり、大人となつてから動物を冷酷に取扱つたりするのは、之は皆大人が惡いのでございます。大人がまづ自分の動物に對する親切さ加減を省み、改良すべき點は改良して、人道の爲子供の爲に盡さなければなりますまい。

動物虐待の防止は實に是れ人道の問題にして教育上、法律上、衛生上、經濟上、農政上、審美上、動物虐待を防止して社會人情の根本的改善を計らん、との大目的を以て、動物虐待防止會といふ會が一昨年起りました事は誠に結構な事で、已に誰方も御存じでいらつしやいませうが、直接に子供の教育に當つて居る者は特に教育上から子供と動物との關係に付て考へなければならぬと考へます。序でございますから左に右の會の趣意書中の一節を記します。

若し動物をむごく扱ふ事があたりまへの樣に思はれてどこへいつても平氣で牛馬をいぢめ鳥獸を苦しめて居る有樣を子供などが見たり聞いたりしますから自然にむごい事になれてやさしく美はしい心をそこなふ樣になりませう、それですから動物を可愛がる樣にするのは教育の上から言うても大切な事でありませう。

頑是ない子供がとんぼの頭をむしつたり、いなごの羽や脚をとつたり、又すゝんでは犬をいぢめ魚鳥を殺すなどいふわるさは其初別に惡い心ではありますまい、併し之がくせになると終には人に對してもむごい事をして何とも思はぬばかりか却つて人の苦しむのをおもしろく思ふやうなねぢれたものとなつて恐ろしい人殺の罪をさへ犯す樣にもなるのであります、云云、

耳漏(即ちみゝたれ)に付きての注意及豫防法

故飯島八千溪寄

この一篇は長野小學校で、家庭に通知する爲に、いろ〳〵の事項を定めて印劃に附して居る、其中の一項でありまして、前年亡くなられた、飯島君から寄贈せられて居たものであります。

○耳漏　即ち。みみだれが　もとに成ッて　啞や聾に　なるものわ　世間に　ずいぶん　澤山あります　殊に　耳漏から　腦膜炎を　ひき起して　大切な命を失う者も　有ります――たとい　それほど迄に至らなくとも　耳が遠く成ッて　生涯不自由を　して居るものわ　よほど　多いのであります――況んや　耳漏の　うみから　他人に傳染する事も　有るので　ありますから――耳漏に　かかッたら　早く　お醫者樣に　見て　いただいて　すッかり　なおる迄　療治をしなければいけませぬ

○「耳漏わ　からだの毒が　耳から出るのだから之を　なおすと　却て　からだの害に成る」と云ふ俗說も、昔わ　有りましたが　之わ實に　まちがッた　取るに足らぬ說であります

○鼻の病や　咽頭の病が　もとに成ッて　耳漏に成る事が　多くありますから　鼻や　咽頭の　病氣に　かからぬ樣に　注意することが　必要であります